

# 新年

# 北斗ライブラリー

諫早商業高等学校 図書部

## 2025年 巳年 スタート!

今の学年も残り2ヶ月ですね。3学期はたくさん  
の検定があるのでしっかり対策しましょう!!

今年は一ひ年なので、一ひに関する本を紹介!!

- ・「獣の奏者 I 蘭蛇編」上橋 菜穂子
- ・「鬼平犯科帳 決定版(1)」池波 正太郎
- ・「浅草鬼嫁日記 あやかし夫婦は今世こそ幸せになりたい。」友麻 碧
- ・「A」中村 文則
- ・「犯罪小説集」吉田 修一
- ・「虹いろ図書館の1ひおとこ」櫻井 とりあ
- ・「一席二聴 落語で楽しむ古典文学」井口 守
- ・「決戦の島 吉岡清三郎貸腕帳」犬飼 六山

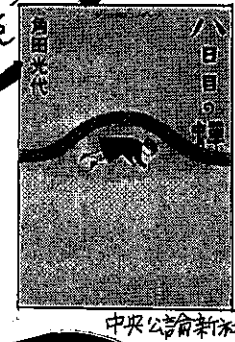
12月19日に行われたライブラリーフェスティバルに参加しました。  
長崎、神奈川、北海道の3県が集まり、図書活動を報告  
しました。他県の活動を自分達の学校に取り入れていきたい  
と思います

第6回 POPコンクール 優良賞

「さまよう刃」東野 圭吾



「六日目の蝶」角田光代  
不倫相手の子供を誘拐し育てる奈和子  
とその過去を引かず、たまたま大人になっ  
た恵理菜。あなたのそばにいたい。そんな  
願いもむなしく奈和子の逃亡はわすれ  
4年で終わってしまう。家探の仲は縮み  
井恵理菜はどの様に過去を受け入れてい  
くのか、大人の身勝手と怒りを覚える  
人生を描いた感動小説  
です。



「夢の終わりで君に会いたい」川村 裕子  
高校生の鳴海は離婚寸前の両親を見るのが辛い  
眠って夢を見ることで現実逃避していた。ある日  
夢でレゾナから落ちたことをきっかけに正夢を  
見るようになる。鳴海は夢で見たことを  
ヒントに様々な困難に立ち向かう。  
この物語はラストがとても感動  
な作品です。



裏面もあり。

「有木桶雄の正難」ひなたしほ  
超能力を振る少年 有木桶雄。たれもが  
憧れる超能力者の元としており、無数の  
通行人の叫びの声が聞こえてはいたり、嫌な  
予知夢を見てはいたり、いとお利口目立に  
平穩に暮らしてはいたり、少し変わったクラス  
メイトたちが有木の元にはせがれ集めて  
まじり予知不明な正難を有木は  
回避することできるのか?



「平安女子の楽しい!生活」川村 裕子  
この本には、平安時代の女性の  
生活様式や恋愛事情、また結婚  
生活について今風の文で詳しく書  
かれています。自由のない社会で  
精一杯生きた女性たちの姿か  
ら学ぶことも多いですね。古文の時代  
考察にも便利



〈リクエスト〉 切り取って図書委員へ預けるか図書室へ

記入者: \_\_\_\_\_ 年 組 \_\_\_\_\_

書名: \_\_\_\_\_

作者名: \_\_\_\_\_

出版社: \_\_\_\_\_

# 北★ライブラリーまらり

諫商図書だより No.6  
令和7年1月30日

3年生のみなさんは卒業間近。高校3年間でどんな本に出会いましたか？  
今回は先生方に、高校時代に読んだ作品で印象に残っているものを挙げてもらいました。

高校時代月1回は読書感想文1200字の千本ノックでした。国語の先生は今でも、細い棒を持って私の夢に出演されます。(笑)

では本題。私の高校時代思い出に残っている本は、俵万智さんの「サラダ記念日」という短歌集です。高2の時にベストセラーになった本で友達と同じ本を買って、休み時間に読んで話してました。古臭い短歌のイメージを変えてくれた本で、今でも同級生とLINEなどで話題にする本です。「今こそ出発点！」は、国語の先生が全校集会で、読書を推進するためにおっしゃっていた言葉です。通勤通学の合間や電車の中で読書楽しもう！今こそ出発点！【井坂美緒先生】

## 「伊勢物語研究会」

高校2年生の時です。古文で「伊勢物語」を学びました。「むかし、男ありけり」で始まる恋愛にまつわる短編集ですが、この主人公の「男」がしょうもないんです。読んでるうちに熱く議論をするようになり、とうとう友人数名を誘って「伊勢物語研究会」を作りました。週1回古文の先生にも参加してもらって、自分が好きな短編を解説し、この「男」のしょうもなさについて議論するという、これまたしょうもない研究会です。でも忘れられない楽しい思い出です。

つきあってくださった古文の先生に感謝！【西 真実先生】

## 「大和物語」あずさ弓

高校の古典の授業で習ったお話。

恋人の男が都に出かけ、帰ってこないまま3年が経過。あきらめて熱心に求婚してくれる他の男と会う約束をしたその夜に恋人が帰って来る。事情を話すと男はあっさり去って行き、後悔した女は後を追うが追いつけず、悲しみのあまり死んでしまうという切ない物語。ラストの指の血で岩に歌を書きつけた場面も衝撃的でしたが、3年も連絡をよこさない身勝手な男に腹が立った記憶があります。

当時、「シェルブールの雨傘」というフランス映画を先生に勧められて見たのですが、このお話も戦争に行って音信不通となった恋人を3年待ってあきらめて他の男性と結婚したら恋人が帰って来るが結ばれないという内容でした。東洋も西洋も、恋愛の期限は「3年」なのだなと妙に悟りました。【山下さおり先生】

高校時代、国語の模擬試験問題として抜粋されている文章を読み、続きが気になって書店で探しては購入していた。なかでも『鬨』という作品にはまり、そこから作者である幸田文の作品を買ってあさった。

あんなにたくさん買ったのに、どこにいったのかあの本たち。内容もぼんやりとしか覚えていない。けれど、エッセイ集の中の言葉は、今でも頭の中で呪文のようにぐるぐる回っている。「あとみよそわか、あとみよそわか。」  
【袋良祥代先生】

## My High school Days 高校の時 これを読んだの おぼえています！



## 有島武郎作「小さき者へ」

高校2年生の時に、「父母の愛は海より深し」と感動した短編。結核の母が子らのために選んだのは、見舞いだけではなく、葬儀への参加も許さないという決断でした。母の死という残酷な現実を見せることで、幼く清い魂が傷つくのを恐れたからです。そして、作者が子らに手向けた「恐れない者の前に道は開ける。行け。勇んで。小さき者よ。」の最終句は、何度読んでも胸に響きます。いつかは父母の愛情を理解する日が来る、そう思って記した小説でしょう。実際に私も、当時は臆気だった感慨が、今はくっきりとした輪郭で立ち上がります。それが名作の力。みなさんもそんな作品に出逢ってください。【中野聖子先生】

高校時代、学校の図書だよりを創刊、初代編集長を自称し、毎月のようにせっせと原稿を書きました。タブレットなどはなく、すべて手書き。

誰も借りないような本を紹介したり、超主観的なランキングを作って発表したりと、やりたい放題を尽くしていました。

そんな私が高校生活の最後に読んだのは、井上ひさしの『東京セブンローズ』。卒業式の前日、徹夜で読んで返却しました。戦後まもない日本を舞台に、占領軍による日本語のローマ字化に立ち向かった人々のお話です。

今自分が使っている言葉はもしかしたら違うものだったのかも…なんて想像しながら読んでみてください！  
【峰松規子先生】

印象深いのは、高1の時の教科書に載っていた、芥川龍之介の「雛」という小説です。

予習して読んできたはず、という前提で授業が始まり、先生から次々と問いが出され、みんな、必死で本文を目で追います。歴史的かなづかいで書かれた文体はなかなか…。緊張感と集中力(?)を持って読んだからか、よく覚えています。

裕福だった商家が没落し、娘の高価な雛人形もアメリカ人に売り渡すことになった。手放す日が近づき家族のそれぞれの思いが交錯する。そして驚きの結末。「そうだったんだ…。」と思いました。味わい深い作品です。歴史的かなづかいで読んでみては？【福本雅子先生】

個性豊かな文章が寄せられました。高校時代のこころって、こんなにも記憶に残るんですね。寄稿していただいた先生方、ありがとうございました。